

- 1 教育事業名 「いきいき自然体験キャンプ」～自然にふれ、人とかわり、新しい自分に気づく旅～
- 2 ね ら い 心因性の不登校児童生徒に対して、渡嘉敷島の大自然の中で日常と離れ、各教室の児童生徒と生活・行動し、安心できる環境の中で自然体験・宿泊体験・交流体験などをすることで、心身を解放させる。そして自分の新しい一面に気づくことで、日常生活において前進するきっかけとなることを目的とする。
- 3 期 日 令和元年9月10日(火)～9月13日(金) 3泊4日
- 4 場 所 国立沖縄青少年交流の家
- 5 募集定員 県内適応指導教室等に通級する児童生徒(小・中・高) 50名程度
児童生徒の関係者(適応指導教室職員・保護者等) 20名程度
- 6 参加人数 34名
- 7 参加者内訳 小学生3名・中学生13名・適応指導教室引率職員18名 (男性17名、女性17名)
- 8 講 師
 - ・照屋 寛信氏(手作り遊び工房ふぁーかんだー) クラフト・野外活動指導
 - ・森 有紀子氏(スノーケリング公認指導員) スノーケリング指導
 - ・比嘉 康裕氏(スノーケリング公認指導員) スノーケリング指導
 - ・米田 英明氏(渡嘉敷村通信員) 平和学習講師

9 実施プログラム

	6:30	7:00	8:00	9:00	10:00	11:10	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	
10(火)			とまりん 集合・ 受付	泊港 出港	渡嘉敷港 着 キャンプ場 へ移動	昼食 (持参 弁当)	オープニ ング・ふれあ いレク・思 い出表現		テント設営		火お こし		夕食 (野外炊事)	ゆとりの 時間	ふりか えり	シャワー	就寝 (テント)	
11(水)		起床・洗面 ゆとりの時間 朝食(軽食)		海洋研修(大型カヌー・オープンカヤック・スーパーフロート スノーケリング・水泳) 昼食(弁当)							着替え ゆとりの時間		夕食 (野外炊事)	灯りの 時間	ふりか えり	シャワー	就寝 (テント)	
12(木)		起床・洗面 ゆとりの時間 朝食(軽食)	テント撤 収	大型カヌーでハナリ島へ移動(弁当) 海洋研修(スノーケリング)					キャン プ場へ 移動		着替え ゆとりの時間	本館 移動	タペの つどい	夕食 (食堂)	星空観 察	ふりか えり	入浴	就寝 (本館)
13(金)	起床・洗面 朝のつどい	朝食 (食堂)	清掃・荷物 移動 清掃チェック		平和学習	昼食 (食堂)	ふりか えり	エンディ ング アンケート	記念撮影 港へ移動	渡嘉敷港 出港フェ リー	泊港 着・解 散							

10 事業の様子



ふれあいレクリエーション



カレー作り



火おこし体験



まきを使ってカレー作り



灯りの時間



ハナリ島チャレンジ



ハナリ島でスノーケル体験



平和学習



みんなでチャレンジゲーム

11 エピソード（参加者の声、アンケートより）

【参加者の声】

- ・いろいろな生き物を見ることができて、さんごもきれいだった。
- ・班の人と話せたのでよかった。
- ・いろいろ初めての体験がたくさんできた。
- ・人と話すのが苦手だったけど何回かやっていくうちになれたからよかった。
- ・火をつけるのは大変だったけど、つけた後の達成感がよかった。野外炊事楽しかった。
- ・ハナリ島チャレンジはつかれたけど、みんなそれで息が合い、みんなの仲が深まったと思う。
- ・ごはんはおいしかったけど、火おこしや煙などできつかった。

【自分が自信をもって出来たこと】

- ・スノーケリング
- ・発表をがんばった。
- ・早寝早起きができるようになった。
- ・他の教室の人と話げできた。
- ・料理と行動力。
- ・自分の力。
- ・たくさんあったけど、うまく書けない。
- ・正直に自分の思っていることを言えたこと。

12 担当者所見

(1) 成果

- ・はじめは他の児童生徒との関わりに消極的だった生徒が、事業が進むにつれて本人なりの距離感で関わっていけるようになるなど、自分から周りの人に話しかけ、笑顔で過ごす児童生徒が増えてきた。
- ・天候に恵まれ、すべての日程を計画通り活動できたことで、児童生徒が心身を解放させながら渡嘉敷島の自然を楽しみ、自然に感動する姿が見られた。
- ・児童生徒、引率職員、講師、交流の家職員が連携・協力しながら取り組んだことで、どの活動も笑顔があふれる充実したものになった。
- ・事業を通して子供達は互いに協力し合い、語り合い、交流していく中でそれぞれ新たな自分を見つけることができ、自信をもつことができた。
- ・事業後も、日常生活において少し声を大きく出せるようになったり、気持ちが前向きになってチャレンジ登校や通級日数も増えてくるなど、少しずつ前進するきっかけにつながっている。

(2) 課題

- ・参加者が16名と少なかつたため、次年度は参加者を増やすための取り組みをする必要がある。
- ・児童生徒の中にはプログラムや活動が多い場面で戸惑っている姿も見られたので、安心して活動できるよう、ゆとりを持たせたプログラムの設定をしていく必要がある。